
作者の世界

カイヌマソウタ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

作者の世界

【Nコード】

N3586X

【作者名】

カイヌマソウタ

【あらすじ】

たごまっている糸をほくのは大変難しい。
しかしそれをほくのを諦めハサミで切るのか、それとも最後まであきらめないでほく続けるのか…
そんな話です。

紹介

どんな作品でも、必ず作者がいてその作者の中にある物を、文として作り上げる事で小説が完成する。

要は作者ひとりびとりに世界は広がっているのである。

この小説は、この作者の頭の中に広がるものを小説に書きあらわす書きたい事を書く小説である。

特撮・ウルトラ系・仮面ライダー系・スーパー戦隊系などを元にして作る作品です。

よろしく願います。

作者が主人公です。作者は変身はしません（たぶん）。だからよろしく願います。

紹介

・カイヌマソウタ

本作主人公。怪物の脅威から世界を守るべく、自らが呼び出す分身戦士

ソウル？へ自分の精神と魂を共有し闘う。

性格は糞野郎で、かなりへっぴり。

・ウラタヒロキ

準主人公。ソウタの良きパートナーで、心優しい青年。

自らが装着変身して戦う「装着ユニット シグマ」を駆使して戦う戦士。

主にソウタのサポートとして戦う。

ソウル？…正義の魂を持つ戦士。ソウルトリガーに内蔵されているデータに

ソウタの魂を共有することで実体化し、戦うことができる。

全体的に赤色で、目は蒼く輝く。想像するものを実現させることができる。

身長1.9m 体重100?

ユニット Σ（シグマ）…装着することで人体の筋肉への負担を軽減させ、

かつ本来の人間の力の数倍の力を発揮することができる。

白いマスクに赤目で。全身が武器になることが可能。

身長2m 体重150?

・敵組織 ???

謎に包まれた大型の敵組織。様々な世界を破壊し、むさぼりつくす。

小さい怪物から、超大型怪物まで多種多様に操る、飛び道具組織！！

第一話 異世界へ

「ソウルXジウデンカンリヨウシマシタ」

ソウルトリガーから聴こえてきた電子音声とともに、俺は目を覚ました。

時計の針は7時を指していた。ソウルトリガーをPCから分離させて、スタートボタンを押す。

「ジコクハ7時・ジウデン100%」

「X、今日の世界のほつれはどこにある？」

「いまのところ、依頼要請件数は704件、うち699件は引き受け先があります」

「そうか、じゃあ残り五件から、ザッピングしといてくれ」

異世界、パラレルワールド説が存在する今、異世界は謎の悪組織からの侵略をされている

世界も少なくない。その世界を守る仕事が我々、ソウルXの仕事である。

唯一悪組織からの侵略がないこの世界が、我々の拠点となっている。この世界には約400人のソウルベビーが存在する。ソウルメイトとは、ソウルXの使用者である人間をさす。

ソウルメイトとは特殊な細胞を持った人間で自分の魂をソウルXへ共有することができる人間である。

しかし俺の友人であるヒロキのように、ソウルメイトではない人間もこの仕事をしている。人数は少ないが、「Σユニット」といってこれは装着者になるだけで変身することができる。しかし、これも鍛錬された肉体をもつ人間のみが使用できるものであつて、常人では使用不可能。主にソウルメイトのサポートとして使われる。

世界のほつれとは、異世界が出したSOSのことである。

「おはようソウタ、今日はどうするの？」

これがΣユニットの使用者であるウラタヒロキ。基本的に依頼は彼とこなしている。

「今、Xにザッピングしてもらってる。残り五件だったんだ」

「今日はみんな能動的だね」

するとソウルトリガーから、Xの声が聞こえてきた。

「ザッピング終了。一件の依頼を引き受けました」

「そうか、分かった。そのワールドのデータをくれ」

瞬時に送り込まれるデータ。開くと「W - 64 ZIORITY」と書かれている。

Wとはワールドの略、数字は異世界の番号。無限にある数字のため、今回の64は早い。

英語で書かれているのは、その異世界の中の街、悪の出没している地域だ。ジオシティと

何ともこじやれている名前だった。

「パピー、準備できた？」

「うん、OK大丈夫だよ！」

パピーとはヒロキの事である。古くからこのあだ名を言っている。理由は…ない。

ソウルトリガーとPCの接続端末で、二つをつなぐ。PC画面に映る行き先とEnterとCancelの文字。

「じゃあいこう。さっそく任務開始だぜ!!」

Enterボタンをクリックすると、ソウルトリガーのデータ粒子装置から、光が放たれ

たちまち二人はデータ化。座っていた椅子が、もぬけの殻となった。

「ジオシティ」

「うはあっ！」

到着したと同時に俺は奇妙な声を出してしまった。着地した場所は、

ビル街の小さな庭のようなところで、草木に突っ込んでしまった。

「大丈夫!？」 「ああ、大丈夫…」

服についた草木を手でほろい立ち上がる。見渡すとそこには自分達の世界にはない、はるかに巨大なビル群が見える。巨大なビル群は我々を来訪者としてさめざめと見下ろしているように見えた。

俺はトリガーをとりだしサーチボタンを押し、怪物を探そうとした。
エネミー

「ソウタ、あそこ！」

パピーが指差す方向に目をやると、車が何者かによって大爆発した。

「どうやら探す必要もないな…。行くぞ」

「うん」

俺たちは爆発した場所へ走り出した。

「グアアアアアアア！」

雄たけびを上げる黒い影。長い尻尾に、鋭利なつめ。顔は恐竜のような見た目。

なんとも恐ろしい。尻尾にを振り回し、逃げまどう人間を次々に殺していく。

「見つけたぜ。パピー、スナップを頼む」

スナップとは、特殊鑑定機能が付いたカメラ型がジェットである。

これで敵を撮ることでソウルメイト本部のデータベースの膨大な資料の中から、的確な資料を得られる。

「種族 ビースト、名 獣人、オウラノサウルス型ノーマルタイプ」

「恐竜型獣人か…珍しいな。行くぜ、X！」

「了解!!」

トリガーを右手に持ち、ユニゾンボタンを押す。このボタンを押すことで、自分の細胞を神経、肌から伝い、トリガーにデータとなつて送られる。

「SUMMONS ソウルX」

「はあああああ、どりゃああ!!」

俺の魂がデータとなり共有され、ソウルXが誕生した。真っ赤に燃え盛る炎のごとく

ソウルXは咆哮を上げる。

「いったんは様子を伺おう。相手の動きをみる」

「ああ、そうだな」

ソウルXは飛び上がり、相手の背後に回る。獣人もそれを追いかけるようにして、Xから

視線を離さない。

Xの戦闘方法は、主に自分の呼び掛けによって行うことが可能である。

つかったことのない技、武器を想像し、魂を共有することでそれをXが動き戦うことができる。しかし、架空の武器などの召喚などは、Xや俺のソウルパワーを奪うため、何度も使えない。

「おりやあ!!」

Xのパンチが相手のあごを捉える。相手は一瞬ひるむが、雄たけびを上げ、Xに立ち向かう。

獣人はXのパンチをかわし、壁を駆け上がり、顔面に回し蹴りを入れる。それを間一髪で両手で止める。くらった攻撃は、自分の体にもひびくのだ。戦っているのは本人ではないと言え、辛い仕事である。

「やつの攻撃は重量級なだけあって重い。長期戦には持つて行きたくないな」

「分かった、じゃあ相手にダメージをやらずとも、小技を打ち続けよう。その代り一点を狙ってね」

「X、とにかく肉弾戦で相手の腹部一点を狙っていけ。相手がひるんだ瞬間に距離を取ってそのまま、ダガーで切り裂く」

「了解!!」

敵に突っ走っていくXは飛び上がり相手の両腕を抑え、腹部に蹴り

をうち込む。

続いて連続パンチを打ち込むと、相手のかたい表皮は少しずつもろくなっていく。

少しずつ相手の動きに隙が見えてくる。相手の尻尾を掴んで投げ飛ばす。相手の腹部に電線が直撃し、電流が流れる。

「よし、今だ！」

Xはクロスダガーという短刀型の刃物を取りだし麻痺している獣人に飛びかかるうとした時だった。

「ソウタ危ない！！」

ヒロキの声で振り返ると、別個体の獣人であろうエネミーが、俺に突進してきた。

その攻撃をもろに体に受けた俺は、一瞬ソウルの共有が不可能となった。

と同時に、Xも俺と同じように倒れた。

第一話 異世界へ 2

もう一度ソウルを共有させると、Xはゆつくりと立ち上がり、もう一度ファイティングポーズをとった。無駄なロスタイムのせいで、せつかくのチャンスが無駄になった。

ヒロキと背中合わせになり、お互いに獣人へ構える。

「どうやら、種族と型は全て同じみたいだね。俺はこっちを担当します！」

「了解した。X、先ほどの攻撃で俺は若干ソウル共有に難があるかもしれない。その時は、俺の命令が多少あいまいになるかもしれない。承知してくれ」

「イエッサー!!」

ヒロキはアタッシュケースを取り出し、ケース中央のボタンをタッチした。

すると一瞬にしてアタッシュケースは、顔、両腕、両足、胸部、腰の五つに分裂した。

「transform unit?」

五つに分裂したそれらは、たちまち身体を這うようにして装着されていく。最後の装着部分であるマスクが付けられ、両目のライトが青く光る。装着完了の合図だ。

？ユニットは、肉体への負担を軽減する事が出来る。かつ、戦闘能力が格段にアップされるのだ。

「はああっ！」

強力なパンチが獣人に打ち込まれる。後ろにのけぞる獣人、その隙に？はビームライフルを取り出し、下腹部を三発狙撃する。

X側と戦っていた獣人は、尻尾を振り回し暴れまわる。しかしそれを難なくかわすと飛び上がり、一回転して相手の背後へ回る。

「よし、尻尾を斬りおとす、Xブレードを使え」

「おっしやああ！」

ソウルメイトの力によって作られるそのブレードは、Xのように紅く光る。

ブレードをかざし、振り下ろすと、鮮血が飛び散り、奇声を発する。尻尾は斬りおとされて、なんとも情けない姿になった。

「とどめだ、X。奴の体を腹部から貫け」

「……はあ……どりやあぁ！」

離れていた距離を走り詰めていく。

「Xスピーアー！！！」

先ほども一点を狙っていた腹部に、見事に貫かれるXブレード。相手の身体からは血が飛び散り、獣人はその場に崩れ落ちた。そして、大爆発を起こした。

「X、戻っていいぞ」

Xとの魂の共有を終え、Xはトリガー内に戻ってくる。戦いの傷が反映されるため、多少身体にはあざなどができていた。

「はああっ！！！」

？の飛び蹴りが相手の下あごにクリーンヒットする。相手は一瞬ひるむと、すかさず？は背後にまわり、尻尾を掴む。そのまま投げ飛ばすと、近くにあった看板に直撃し、動けなくなる。

「そろそろとどめだ！」

「ビームライフルアタッチメントセット」

ビームライフルにフロート弾を装填し、相手の頭上に照準を合わせる。

ゆっくりと照準を合わせる。動けない獣人はようやく動こうとあがきだした。？はトリガーに手をかけた。

「発射！」

ビームライフルからフロート弾が放たれると、一直線に弾道は進み、獣人の頭上で破裂する。すると冷却成分が放出され、一瞬にして相手の身体が氷漬けにされていく。次第に相手はピクリとも動かなくなった。

「圧縮冷凍装置発動を許可してください」

PCを起動させて、本部のデータベースから許可が下りる。

「圧縮冷凍装置、解禁」

氷漬けにされた獣人は、本部から送られてきた「圧縮冷凍カプセル」
によって捕獲されて、研究材料の一種として使用される。

「恐竜型の獣人か…てことは、相手の組織もだんだん力が付いてきたのか」

「うん。でも相手の真の闇には近づけてないんだね…。相手がいつたい何者なのかも、そしてどんな組織なのかも、根本から分からないね。目の前の敵を倒すしか今はできないね」

1話 完

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3586x/>

作者の世界

2011年10月22日00時10分発行